

森鷗外「蛇」論：語ることの価値

天野，愛子
九州大学大学院比較社会文化学府修士課程一年

<https://doi.org/10.15017/11023>

出版情報：九大日文．9，pp.16-27，2007-03-31．九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

森鷗外「蛇」論

——語ることの価値——

天野愛子

一 先行論分析と本論考の目的

明治四三年一月九日の鷗外日記に、「蛇を草し畢る」とある。小説「蛇」は、年が明けて明治四四年一月一日「中央公論」に発表され、追って大正二年七月の『走馬燈』に収録された。田中実は単行本収録に関して以下のように述べる^①。

「沈黙の塔」は『烟塵』(明44・2)に、「食堂」は『分身』に収録され、「蛇」に続く「カズイスチカ」(明44・2)「妄想」(明44・3・4)も『分身』に収録された。大逆事件に關する反応は単行本の際は分散させられた。形態のうえで、「蛇」は「百物語」(明44・10)などとともに『分身』に入られてもよさそうであり、「蛇」の評価もほぼ鷗外の私小説として捉えられた。

「蛇」以上に私小説的作品として論じられた「半日」は、鷗外四八歳の明治四二年三月一日、「スバル」に掲載されている。先行研究では、鷗外が家と妻志げとの不和を作品に投影したという点に注目が集まった。両作品では、明治の世が生んだ〈新

しい女〉の入籍による家庭内の不和が問題となっている。竹盛天雄も『「蛇」について』の中で「外枠はともかくとして、中核となる作者の創作心理は、『半日』と同根の家庭内の問題から生まれたものとしてよいのであろう」と語る^②。

「蛇」を最初に問題にしたのは岸田美子であった^③。岸田は、〈孝〉の思想を持たない美しい妻は鷗外の後妻志げがモデルにされていると語り、美女を妻に迎えた鷗外の心境を「雁」を引いて次のように指摘した。

「親が子を見ても、老人が若いものを見ても、美しいものは美しい。そして美しいものが人の心を和げる威力の下には、親だつて老人だつて屈せずにはゐられない」(雁)とする鷗外の本能的な、人並すぐれて強い美への欲求は満足されたのである。

だが、両作品について見てみると「美しいものが人の心を和げる威力」は、長続きしなかつたといわねばならない。「半日」では奥さんが姑を毛嫌いするあまり孝明天皇祭をも欠席しなければならぬ夫婦喧嘩に発展し、「蛇」ではお豊本人が発狂する事態となる。岸田は鷗外の実生活が作品に投影されているとし、妻に「感溺してはゐらない——といふこの一語こそ、「蛇」の眼目であらう」と結論づける。金井英一の指摘するように「テーマとするところは一読判然、「お豊」に具現される〈新しい時代の女〉の糾弾、告発以外の何物でもない」^④。ところが「半日」と「蛇」の共通項だということは分かる。しかし、自然主義文学を否定した鷗外が、自ら私生活を暴露するためだけの小説を

書いたとは考えにくい。「普請中」(『三田文学』明43・6)を論じた新保邦寛は明治四十年代を次のように語る⁵³⁾。

この時代、雑誌メディアを通じて作家の個人情報が多量に流出し、そういう情報を前提とするいわば《楽屋落ち》小説の類いが、自然主義文壇を中心に成立していたことはよく知られている。《豊熟時代》の鷗外も、そうした時代のモードを睨みつつ創作していたことは、「半日」(『スバル』明42・3)にしる「カズイスタカ」(『三田文学』明44・2)にしる《自家用小説》に見紛う作品を書いていることでも窺える訳で、いわば彼は、文壇という《解釈共同体》に向けて執筆していたかの如くである。

鷗外は「杯」(『中央公論』明43・1)のなかで「わたくしの杯は大ききくはございません。それでもわたくしはわたくしの杯で戴きます」と書いている。三好行雄はこの台詞を「当時の文壇の主勢力だった自然主義の杯ではなく、小さくても自分の杯で、真の自然、真の文学を酌むという意を寓する」と解説している⁵⁴⁾。

「半日」から私小説的要素を排除し、小説としての価値を高めることに成功した作品が「蛇」であると読み、「蛇」の評価を「半日」の改良版だとして定着させるには少々無理があるようだ。

作家論的読みが作家の執筆意図から逸れるとの反省から、次第に作品論も活発になった。瀧本和成は、千足に消極的受動的な洋学受容の問題を持たせ、なぜ蛇が仏壇にとぐるを巻くのが説明できないというエピソードから、自身の思想に「堅固

な意志」を持たない知識人の限界が語られたことを指摘し、また理学士については「近代科学とそこに立脚した分析能力の獲得に洋学受容の成果をみようとする作者の意図が示されている」とコメントした。そして穂積家内部に焦点を当て、「蛇」では封建主義と近代主義が相互に批判されているが、「人間性」の立場から封建主義の方が近代主義よりも上位にあると述べ、清吉やご隠居さんの再評価を試みている⁵⁵⁾。

「蛇」の語り手である「己」に注目した池田嘉穂子は「己に即して読むと、第一部から結末までを〈理性〉という要素が貫流していることが確認できた」とし、理学博士の「己が、ある家の家庭内悲劇の解決を」〈理性〉をもって「図る」という流れを持つ話である」と述べ、〈理性〉の一語をもって作品を斬る⁵⁶⁾。しかし、蛇退治の場面で「somnambuleのような歩き付きをして」いる千足まで「実に強い理性の持ち主である」とする読みは少々強引だと言わねばならない。むしろ池田以前に、「蛇」を「混沌」の世界」ととらえた大屋幸世の方が作品の世界観を言い当てているようだ⁵⁷⁾。大屋は冒頭を引いて以下のように語る。

整然としない不快感をとまなう人間の五官、感覚性への混沌さ、曖昧さのうちに、冒頭の〈己〉はいると言つてよからう。そして私にはこの〈混沌〉が、作品の主調低音となつてるように思えるのだ。

アステリスクを挟んで四部に分けられる「蛇」は、次のように始まる。

明け易い夏の夜に、なんだってこんなそうぞうしい家に泊り合わせたことかと思つて、己はうるさく頬のあたりに飛んで来る蚊を逐いながら、二間の縁側から、せせこましく石を据えて、いろいろな木を植え込んだ奥の小庭を、ぼんやり眺めている。

この後、「青い烟が器に穿つてある穴から、絶えず立ち昇つて、風のない縁側で渦巻いて」とあり、「青い烟」が「渦巻く」という表現から、題名の「蛇」が連想される。第三部で「大きな青大将である」と種類の規定があり、第一部でわざわざ「青い烟」と書き込まれているところからみても、冒頭と結末の対応が見てとれる。山崎國紀は「当初『蛇』は、深刻な家庭内小説を意図したものでなく、「幻怪性」を企図したものではなかったか」と指摘し、冒頭部を引いて以下のように記述した¹⁰⁾。

「夏の夜」という時間、「泊り合はせた」家の「二間の縁側」で「己」は「うるさく頬のあたりに飛んで来る蚊を逐ひながら」「ぼんやり眺めてゐる。」この静かさと倦怠は、何か不気味な予感をほらんでいる。

「蛇」は、明け易い夏の夜一〇時から一二時までの二時間、信州の由緒ある旧家で、気の狂つた嫁について三人の男性が話しあうという一種の怪奇小説である。

「己」は「うるさく頬のあたりに飛んで来る蚊」を逐いながら小庭を眺めている。黄昏時には「大きな蝦蟇が一疋いつまでも動かず、おりおり口をぱくりと開けて、己の厭がる蚊を食つていた」が「夕飯」後にはもういない。蛇を連想させる「青

い烟」が「身のまわりを繞っているのに」役立たない。うるさい蚊を、これまたゲロゲロとやかましそうな蝦蟇が「食つて」いたところはまた良かったのだ。蝦蟇の役が「蚊遣の土器」に代わつてからというものの、「己」は蚊のうるささに耐えきれなくなつている。そこに「女ののべつにしゃべつている声」が混ざるものだから、穂積家の第一印象は「そうぞうしい家」となる。そもそも穂積家の悲劇は「奥さんが寡言善行というような話が嫌いだ」と云つた」ことに起因していた。「食事の時の」「善行寡言なんぞというものは」「聞くに堪えないというわけのものではない」が、結果として穂積家は「外の話のしたいのをも我慢する」「沈黙の家」になる。「話」を禁止した奥さんは、発狂後しゃべり続けることになるのだ。このエピソードは、どうでもいい話をするのが「楽しい生活」を送る上でいかに大切かを物語っている。声を持つ蝦蟇が「己」の厭がる蚊を食し、静かな青い烟が役立たないという描写の中に、病の原因も見い出せそうだ。

病の原因と対処法が分かればお豊の謎が解けると考えていたところ、この小説の構成が二通りあることに思い至つた。ひとつは従来通りアステリスクに従つて章ごとに見る方法で、もうひとつは時計の進行に従つて読む方法である。時計の記述に従つて読むと、「己」が「懐中時計を出して見れば十時である」ことを確認するところまでが①、清吉や千足が穂積家や自身について語り「十一時の時計が鳴つた」ところまでが②、蛇退治を終えて「丁度時計が十二時を打つた」ところまでが③、日付

が変わった後の残りの部分が④となる。

アステリスク読みは「己↓清吉↓千足↓お豊」というように問題の中心に向けてじわじわと外から責めていく作品観を創りあげる。一方、時計読みでは清吉と千足が同じ展開位置に置かれるため両者を同列と見る読み方が可能となる。本稿ではアステリスク読みと時計読みの解釈を示した後、明治後期文壇への考察を加え、「蛇」の主題を考えてみたい。

二 〈アステリスク読み〉と〈新しい女〉

冒頭からアステリスクによって区切られる第一部では、「己」が観察した穂積家の状況が語られる。

ここまで案内をせられたとき、通った間数を見ても、由緒のありげな、その割に人けの少い、大きな家の幾間かを隔てて、女ののべつにしゃべっている声が少しもと切れずに聞えているのである。

「相手の詞が少しも聞えない」ことから、「己」は「女は一人でしゃべっているらしい」と推察する。清吉の「病人がありまして」と言葉に「まさか病人があんなにしゃべり続けはすまい」と思考を巡らせ、「もしや狂人ではあるまいか」と疑う。

「次第に家の内がしんとして来るので、例の女の音が前よりもはつきり聞える」ようになり、「己」は「どうした女だか聞いてみよう」と決心した。「己」の「話をしていても好いかい」との誘いに、清吉は「わたくしはどうせ今夜も通夜をいたしま

するのでございます」と、まだ眠らないことを告げ、第二部へのバトンが、外からの訪問者である「己」から家中の清吉へと移る。

第二部では、先代の信仰及び遺志の説明、清吉の経歴、清吉から見た千足の印象が語られる。先代は「佐久間象山先生を崇拜して、省儉録を死ぬまで傍に置いていた」「それでいて」「仏法の信者であった」という。朱子学を背景にしている「省儉録」には秩序を重んじる思想が記され、「仏法」には恩を感じて感謝する思想が記されている。「それでいて」の一語は、朱子学が人としての道を秩序付けから規定しているのに対し、仏教は人とのかわりの中で受けうる恩恵を説いていることから選択されたものと考えられる。朱子学が下から上への敬意だとすると仏教はもともと受けていた恩を返すという発想で、恩の応酬が双方向に移動する。朱子学が権威者への奉仕を義務づけているのに対し、仏教は自発的な奉仕を促している。先代は「多額納税者で、貴族院議員になるところであった」ほどの人物であるから、国家に対する義務と恩を感じながら消日していたのだろう。その先代から清吉は「四恩」を忘れずにいるよう諭された。清吉が実直で忍耐強く、会話の中でも「四恩」「報恩」という言葉を自然と使っているところからみても、先代から受け継がれた仏教の影響下にいることが分かる。「商人になろうと思つて」いた清吉は「先代の穂積の主人が卒中して、六五歳で頓死した」時、「取るものも取りあえず」信州へ帰つてきて以来「穂積家一切の事を引き受けて、とうとう一生独身で暮した」

ほど全てを穂積家のために捧げることとなる。

ひとり息子の千足は「段々大きくなるにつれて少し弱々しい青年になった」とされ、奥さんを迎えるときに「どうでも好い」と無気力な発言をし、清吉を不思議がらせている。清吉は先代の死後新しい主人となった千足のことを「張合のない」ように感じているのである。

続いて第三部では、お豊の夫である千足が登場し、「神経の興奮しているらしい声で」宿を引受けた経緯、母と妻に対する気持ち、自分自身のことを語る。千足は「小さい時から母に苦勞を掛けていながら、母を寂しい家で死なせてしまいました」と後悔する。続いてその原因となった妻を離別しないことについては、三つの視点から言及している。「民法もある世の中で妻や里方の親類が承知しないのに「母に優しくくない」ことくらいでは「無論法廷で争う理由なんぞにはなりません」と言ったのが一つめ、「世間体」を挙げたのが二つめ、清吉が「腹の中ではわたくしを意気地がないように思っ」ていることを察して「わたくしは決して惑溺などはしていません」と断りを入れたのが三つめ。お豊に困り果てているのである。(新しい女)について、「半日」の主人公・高山峻蔵は次のように考えていた。

孝というような固まった概念のある国に、夫に対して姑の事をあんな風に云って何とも思わぬ女がどうして出来たのか。西洋の思想から見ても、母というものは神聖なものになっっているから、夫に対して姑を侮辱しても好いと思う女

は先ずあるまい。東西の歴史は勿論、小説を見ても、脚本を見て、おれの妻のような女はない。これもあらゆる価値を踏み代える今の時代の特有の産物か知らんと、博士はこんな風な事を思っている。

〈孝〉とは一般的に「よく父母に仕える」こととされる。「半日」の奥さんは「この家に来たのは、あなたの妻になりに来たので、あの人の子になりに来たのではない」と発言する。この女性には〈孝〉の思想が欠けている。高山博士は「一体おれの妻のような女がまたと一人あるだろうか」と思いながら「あらゆる価値を踏み代える今の時代の特有の産物か知らん」と、考えを归结させている。博士が奥さんのような女性を明治の時代が量産した存在だと考えていた事がうかがえる。では、「あらゆる価値を踏み代える」とは具体的にどうすることか。

「半日」では、「わたしまた何かのお稽古に行くことにしたら好いかと思うわ」との奥さんの提案に対し、高山博士は「モルヒネで痛を止めておこうというような、姑息な事には賛成が出来ない」と一蹴する。むだ遣いの過ぎる嫁に不純な動機で稽古事をさせるほど高山家に余裕はない。また、事あるごとに玉ちゃんを連れてどこかへ行くと言いつ出すのも、博士から見るとわがままな現実逃避であろう。山崎一穎によるとこれらのエピソードは、現実には鷗外の妻志げが、家計を任せてもらえず財産分与の対象から外されたことや、娘の真里を連れてたびたび実家へ帰っていたことに関係しているらしい⁽¹⁾。

さて、「蛇」では、財産問題も娘人質問題も出てこない。そ

の代わり、価値観のすり替えは、お豊が「寡言善行」の話を「偽善」の話と解釈するエピソードに集約されている。「己」から「内輪の面白くなる」原因を尋ねられた千足はお豊の考えを次のように説明する。

妻の考では人間に真の善人というものは無い。もし有るとしても、広い国に一人あるとか、千百年の間に一人出るとかいうもので、実際付き合っている人の中には、そんなもの有り方がない。善い事をしたり言ったりするというのは、ためにする所があるので、自分を利するのである。卑劣である。これに反して、悪い事は誰もしたい。しかしそれを吹聴するには及ばないから、黙っている方が好い。よしまた言うにしても、悪い事の方なら、正直に言うのです。

あるから、虚偽でもなければ、卑劣でもないと言うのです。「何事でも順序を立てて考えることは不得手であるのを、博士が論理で責めるから、半分夢中で受容をしている中に、いつでも十六六指のやうに詰められてしまう」という「半日」の奥さんに比べて、この見解は理論的だ。「半日」の奥さんになくて「蛇」のお豊にあるものといえれば女学校卒の学歴である。千足の友人は「どうも今の女学校を出た女は、皆無政府主義者や社会主義者を見たような思想を持っているようだ」と指摘する。そして「authority」というものを一切認めぬ」というのがその忌むべき思想とされる。「親」「お上」「神様」「仏」「天帝」を尊重してきた高山家・穂積家に奥さんやお豊はそぐわない。「お豊さんが東京へ稽古に行けば、あれは千足さんの処に嫁入りを

するとき、負けてはならぬから行くのだなどという噂さえあった」という記述は、嫁ぎ先で父母や夫に尽くすというよりは軽く扱われないようにするためといった意識を感じさせる。事実、結婚後には姑の寡言善行を聞かないというわがままを通してしまふのである。絶対者への疑問が生じた時、権威は弱まる。「半日」では高山博士が理詰めで奥さんを黙らせることができたのに対して、「蛇」では千足の方が「馬鹿らしくもあり不思議に思つて」いながら反論できずにいる。「蛇」には「半日」より、なお権威をよりどころとした「孝」の思想が通用しない世界が描かれている。「蛇」に記された「authority」と「egoist」の關係は、権威を認めず自己の思想だけを頼りに進んでいけば利己主義的な生き方に陥り破滅へと向かうと結論づけられている。お豊はそういう存在を象徴しているのである。

時代的背景として、お豊のような強い女性をサポートする風潮があったことも見逃せない。瀧本和成は、明治四四年に組織された青鞥社の中心人物である平塚らいてうが「ウォーレン夫人の職業」にふれて「青鞥」に発表した論文を引用し、平塚がヴィヴィを「人工的な虚偽、矯飾、偽善の仮面を剥奪して人生を只有の儘に受容れやうとしてゐる醒めた女」として評価し、そこに新しい女性の生き方をみてとっていると指摘した。そして明治四五年六月発行の「中央公論」の中で鷗外が平塚を「立脚地の奈何は別として、書いてゐることは八面玲瓏である」と評していることも合わせて記述している。しかし、平塚は大正三年になつて自らの考えの変化を「内生活の空虚といふよりは

寧ろ皆無なああいふ女の生活を人としての女の理想的なものだとは夢にも思へなくなつた」と記す。鷗外はひとり、ドイツの戯曲者も日本の活動家も見破れなかつた〈新しい女〉の空虚をみつめ、「立脚地の奈何は別として」と但し書きつきで評価した。お豊は立脚地をもたないという弱さを抱え、自己の破壊へと向かうのである⁽¹²⁾。

作品中の「先代の妻」のように「実に優しい女で、夫の言うことに何一つ背いた事がない」という古風で優しい人でいられたなら、絶対的な安心感のもとで日々生活できる。常識となっているため周りからも受け入れられる。しかし、〈新しい女〉となると話は簡単にいかない。高等女学校でエリート意識を刷り込まれ、理論を振りかざして他を圧倒することができて、幸せにはなれない。食事中のおしゃべりを義母にやめさせることができて、「沈黙の家」になつただけで「楽しい生活」は来なかつた。悲劇の原因は、用いる理論の本質をお豊が理解しなかつたこと、また受け入れる側の備えができていなかったことにある。これは、イデオロギーの崩壊・新しい価値観の登場という場面で出てくる典型的な仕組みのように思える。「蛇」の場合、父権絶対主義という一種のイデオロギーの崩壊が弱々しい夫と勝気な妻という対照の中で描かれた。男女平等の萌芽に見える新しい価値観は、お豊が偽善を嫌い、夫に論をもって対抗するさまから見てとれる。そして新旧どちらの思想も作品中では浮かばれない。旧価値観を代表した義母は寂しい晩年を送つた後に死去し、新価値観を代表したお豊は発狂する。新し

いイデオロギーは人を流しやすく、悲劇を招きやすい。

第四部では、蛇を取り除くという〈応急処置〉を終えた「己」が、「専門家を呼んで見せるが好い」と勧告する。小説は〈病状の本質的な改善〉のためにヒントを与えた形で幕を閉じる。アステリスクに従つて読むと、第一部は「己」が訪問者の立場で穂積家を観察する場面、第二部は清吉が奉公人の立場で穂積家を語る場面、第三部は千足が主人の立場で嫁の病気を語る場面、第四部はお豊の改善への光が見えてくる場面となる。こうしてみると、冒頭から結末へ向けて〈新しい女〉お豊の病気に話の焦点が絞られていくことが確認できる。

三 〈時計読み〉と〈蛇退治〉

はじめに述べたように、冒頭から「懐中時計を出して見れば十時である」と、「己」が時刻を確認するところまでを場面①としたい。「女ののべつにしゃべっている声」のなかで、「己」がかるうじて理解できたのは「土地の訛りの、にいと云う互漚波が」「東京で、ねえと云う」ことである。「ねえ」と呼びかける女の声を「何事をか相手に哀願しているようである」ととらえた「己」は、その呼びかけに応じるように穂積家の問題と関わることになる。①は「己」が穂積家の問題に引き込まれていく(きつかけ作り)の場として機能している。

続く②の場面は「遠いところでぼんぼん時計が鳴る」から「十一時の時計が鳴つた」までとする。女の声や時計の音を聞いて

聴覚が敏感になった「己」は、清吉の「詞が土地の人と違う」ことに気づく。それに対して清吉は「若い時東京に奉公をいたしておりましたから」と自身を分析する。お豊の言葉を使って信州と東京を引き合わせたこと、清吉の中にある信州と東京を顕在化したことは、地方と東京という「蛇」の隠れたテーマに結びついていく。ここでは④へ向けての先行標示としてとらえておきたい。

清吉は、先代が「これからの人は西洋の事を知らなくては行けない。しかし耶蘇教になつてはならない。耶蘇教の本を読んで見たが、皆浅はかなもので、仏教の足下にも寄り附けないと云っていた」ことを記憶している。ここから、先代は〈和魂洋才〉を志す人物だったことが読みとれる。

千足は宿を引き受けた経緯を「近来不為合せな事が続きまして、この老人が大層心寂しく存じている様子でして、名高い学者の方に泊ってお貰い申したら、何か心得になるような事が伺われるかも知れない」と提案したためだと説明する。清吉は自分の結婚まで犠牲にして穂積家に仕えることを決めた人であり、現状打開に必死である。「己」に宿を提供することを「報恩」だという清吉は、仏教信仰を具現化した存在だ。先代が〈和魂洋才〉ならば、清吉は「四恩」を体現した〈和魂和才〉の人物だと考えられる。

千足は、発狂した嫁をもてあまし、「薄志弱行だと云われれば、それだけはいしたし方がありません。それにはわたくしに極まった人生観が無いのが原因になっています」と述べる。「わ

たくしもどうなるか知れませんが」と、自分自身を救う方策さえ浮かばない千足の絶望感は深刻だ。千足の語り終わった直後「十一時の時計が鳴った」ことになっており、「主人の血走った目は、じいっと己の顔に注がれている。己はぞっとした」とあることから、千足が「己」に助けを求めたことが分かる。この後、「そんなら、さっきまで声のしていたのが奥さんですね」と、十一時を境にして、聞き役に徹していた「己」が状況打開のために発問する。②は穂積家の状況説明の場として機能している。

③は蛇退治の場面である。「仏名を唱えている」清吉や「*somnambule*」のような歩き付きをして、跡から附いて来た「千足に比べ「兎に角この蛇はわたしが貰って行こう」と申し出る「己」は頼もしい。彼は清吉や千足より高位にいることが分かる。

蛇退治といえば「蛇」の他にも「雁」がある。

鳥はばたばた羽ばたきをして、啼きながら狭い籠の中を飛び廻っている。何物が鳥に不安を与えているのかと思つて好く見れば、大きい青大将が首を籠の中に入れていのである。(中略) 岡田は手を弛めずに庖刀を五六度も前後に動かしたかと思う時、鋭くもない刃がとうとう蛇を俎上の肉の如くに両断した。(雁)

「雁」の岡田が青大将を殺すのに対し、「蛇」の己は生け捕りにする。

己は蛇の尾をしつかり攪んで、ずるずると引き出して、ちゆうに吊るした。蛇は頭を持ち上げて、自分の体を縄を纏

ったように巻いたが、手までは届かない。己は蛇を畚に入れて蓋をした。(「蛇」)

蛇退治というエピソードに英雄伝としてのの役目を負わせるところは両作品に共通している。ただし、殺すか生かすかの違いがある。「利害関係だけでも本当に分かっていれば、むちゃな事は出来ない」と述べる「己」は、蛇を生け捕りにする。「女だつて遠くが見えないために、自分の破滅を招くような事をすれば、暴力で留めなくてはならないでしょう」と言う一方で、「打つなんという事は非常手段ですから、教師だから打つても好い、夫だから打つても好いというように、法則にして置くのは不都合でしょう」と、暴力はあくまでも非常手段のだと説明する。

先代・清吉・千足に対して「己」はどんな人物として読むべきだろうか。「egoiste」「Dogma」「égalité」「Bernard Shaw」など横文字を織り交ぜながら千足と話したり、「英国の笞刑」を例に持ち出したりするところから見て〈洋魂洋才〉の人物だと解釈したくなる。しかし「基督の山の説教などを高尚なように云うが、あれも利害に憑えているのです」と指摘したことも合わせて考えなければならぬだろう。「己」は西洋事情に精通していても傾倒してはいない。「己」には特定の信仰も行動パターンではなく、豊富な知識に裏打ちされた思考力と状況に応じて処置を講ずる行動力が備わっている。「己」は思想から自由であるからこそ、臨機応変に行動できているのである。

④はアステリスク読みと共通の部分から成る場面で、「東京

から専門家を呼んで見せるが好い」との勧告が記される。東京は学問・思想・技術の最先端を担う場所である。千足とお豊も学問をしに東京へ出た経験があるが、千足は「薄志弱行」のため思想を現実を生かす気力をもたず、お豊は偏つた思想に固執したため発狂した。苦しむお豊と穂積家を救うためには、最新の知識を現実世界に生かす力のある専門家を呼ぶ必要がある。④の勧告により、穂積家は思想的に解放され現実世界と向きあうきっかけを与えられたのである。

時計読みに従つて解釈すると、①は「己」が穂積家の問題に巻き込まれる場面、②は清吉・千足の人物像を明らかにする場面、③は「己」が千足との問答を通して自身の信条を明かし、蛇を退治する場面、④は蛇退治によつて全幅の信頼を得たであろう「己」が、穂積家に今後の対処方法を示す場面である。②を③へ向けての序章と見なし、「清吉・千足」対「己」の対照を示す場として読めば、「蛇」は「己」が支配する物語であると考えられる。この支配感こそが思想から自由であれという作品のメッセージにつながっていくのである。

四 「蛇」に描かれた明治の文学史

貴族院議員にもなれたはずの先代は、〈和魂洋才〉思想の持ち主で、江戸後期から明治十年代ごろまでを生きた設定になっている。この頃には『安愚楽鍋』(明4)、『仮名垣魯文』、『学問のすゝめ』(明5)、『福沢諭吉』、『経国美談』(明16)の矢野

龍溪がいる。これらの作品は、あくまでも西洋の文学を取り入れるための準備期間のものであり、この啓蒙期を経て、文学とは何かを問う時代に入る。「蛇」においても先代は清吉や千足に遺志を伝え、早々に亡くなつていく。本当の戦いが始まるのは先代の死後である。

清吉は、「西南戦争の時」奉公先の「問屋が糧秣品を納めて、大分の利益を見てから、四五年立つた」頃、先代の訃報を受け穂積家へ戻つた。西南戦争が明治一〇年の事件だということを考え合わせ、明治一〇年代が清吉の雌伏期間、明治二〇年代から千足の成人までを清吉が穂積家を支えた期間としたい。平岡敏夫は、明治二〇年代のナシヨナリズムを「欧化主義の反動としての国粹主義と一般にいいならされているが、たんなる国権主義・国家主義ではなく、西欧への心酔あるいは批撃をやめて、あくまで国民の内面的自覚に基づく民族自立の想を掲げる志向」があつたことを挙げ、この風潮の拠点となつたのは政教社の機関紙「日本人」や陸羯南主宰の新聞「日本」であつたと述べている。⁵³⁾先代が亡くなり、穂積家一切を任せられたとき、清吉は「なんとかいう、歌を四角な字ばかりで書いてある本」という曖昧な理解にとどまる儒教思想や、先代が否定した基督教思想ではなく、彼にとつて最も分かりやすく馴染み深かつた仏教思想に従ひ四恩を体现した。(和魂和才)の清吉は、明治二〇年代ナシヨナリズムを表象した存在だと考えられる。

千足は早稲田卒の、「堅固な意志」を持たない人物として描かれる。鷗外と「没理想論争」を繰り広げた坪内逍遙は明治二

四年に「早稲田文学」を創刊した。鷗外は逍遙を「イデーがない」と批判する。これは千足が「堅固な意志」を持たないことに通じる。清水茂は『小説神髓』(明18〜19)を次のように解説した。⁵⁴⁾

技法上「模写」主義の立場に立つてこれを力説しながら、かならずしも「模写小説(ア、チスチック。ノベル)」に對する「勸懲小説(ダイタクチック。ノベル)」を本質的に完全にのり越えることをしていない。(中略)「意匠」、「内部に包める思想」といつた概念を、主として小説の主題・構成上の発想、裏面的心理現象といった技法上の概念としてとらえただけで、人間の本质追及にかかわる思惟・イデー、人間性探求の眞の思想性に結びつけたところの、小説全体がかかわるところの根源的な方法的概念として把握できなかったことにもよつてゐる。

早稲田で様々な学科を修めたのに「極まつた人生観が無い」と嘆く千足は、穂積家の危機に際しても為す術を持たない主人である。これは、逍遙が色々な概念を「技法上の概念としてとらえただけ」で「根源的な方法的概念として把握できなかった」ことに通じる。事実、逍遙は『当世書生氣質』(明18)において自らの小説理論を実践し得なかつた。二葉亭四迷の『浮雲』(明20〜22)も未完である。このようなことから千足には写実主義を表象する要素があると考えられる。

また、自然主義を表象する人物として、お豊を挙げておきたい。彼女は姑に寡言善行の話をやめさせ「いつかは楽しい生活

に入る」と信じていた。「ありのまま」というのは「全てをこわしたところ」と同義になる場合がある。自然主義文学は「ありのまま」を描くところから新しいものが生まれるという発想をもっている。そこには知性が欠ける。「下の下までの人間を理性のある人間と同一に扱おうとしているから間違っている」としながらも、打つということを「法則にして置くのは不都合でしょう」と述べる。「己」は「罪を憎んで人を憎まず」の人である。

「己」は余裕派の鷗外を象徴する姿で描かれる。内田道雄は明治四〇年代の鷗外について次のように述べた¹⁾。

四〇年代の文壇といえば、自然主義作家の壟断するところであったから、漱石・鷗外は共に自ら文壇の外側に立つことになった。反自然主義という概括は後代のもので、二者ともに反自然主義の立場を振りかざすことはなかった。自然主義文壇との二者の懸隔は、まずその年齢（明治四〇年という時点をとれば、漱石四〇歳、鷗外四六歳）、公的閱覧、学識という文学外的動因によって決定的に定まった感がある。

外からの訪問者である「己」は「文壇の外側に立つ」鷗外を彷彿とさせる。「学識」があるという点は「己」と鷗外の共通項である。「己」は、思想に縛られることなくその時々で最良の方法を選ばばいいのだという知的なメッセージを残していく。「東京から専門家を呼んで見せるが好い」との勧告は、文壇の枠にとらわれることなく語れという、鷗外から若い文士たちへのメッセージだったのかも知れない。（新しい女）や思想の間

題を説くだけなら評論でも著せる。文学の形にする必要があったのは、他ならぬ文学の問題を抱えていたからではないだろうか。

この作品には問題が三つあった。一つめは鷗外がアステリスクによって最も分かりやすく示した（新しい女）の問題、二つめは思想固持の問題、三つめは文学のあり方に触れる問題である。三つのメッセージは徐々にその抽象度を増していく。（新しい）女の問題は誰にでも分かるものとして描かれ、思想固持の畏は「下の下までの人間」に対して「理性のある人間」を対象に伝えられ、文壇の問題は登場人物中の要素に着目することで明かされる。これら三つの問題は、独りよがりにならず他者と話をすることで解決の糸口が見えてくるものばかりである。もの言わぬ「蛇」が題名に据えられたことで作品全体に沈黙の不気味が漂う。鷗外は「蛇」を通して会話の価値を読者に伝えていたのでないだろうか。

【注記】

- 1 田中実「先導者としての森鷗外覚え書——「蛇」のころ、あるいは「妄想」まで——」（『国文学論考』一九八四年三月）
- 2 竹盛天雄「鷗外 その紋様・その16『蛇』について——『寂しき人々』を補助線として（三）——」（『国文学』一九八〇年一月）
- 3 岸田美子「蛇」と「半日」（『国文学 解釈と鑑賞』一九四二年十月）
- 4 金井英一「林太郎はベルセウスになれたか——森鷗外の短編『蛇』の意味するもの」（『日本の近代化と知識人』二〇〇二年二月）

- 5 新保邦寛「見慣れた」(コスモス)「世界」を見慣れない(カオス)のように—— 鷗外「普請中」—— (稿本近代文学) 二〇〇一年二月)
- 6 森鷗外「山椒大夫・高瀬舟」(新潮文庫、二〇〇四年五月七四刷)における三好行雄の注解。
- 7 瀧本和成「森鷗外「蛇」論——新しい女」をめぐって——」(立命館文学) 一九九〇年三月)
- 8 池田嘉穂子「森鷗外・『蛇』の新しさ——貫流する(理性)——」(日本女子大学大学院文学研究科紀要) 二〇〇〇年三月)
- 9 大屋幸世「鷗外「蛇」を読む——(混沌)——の世界」(国文鶴見) 一九八三年二月)
- 10 山崎國紀「鷗外『蛇』の考察——二つの観点——(立命館文学) 一九九五年七月)
- 11 山崎一穎「『半日』試論——プレテクストの変容——」(森鷗外研究6) 和泉書院、一九九五年八月)
- 12 瀧本(注記7に同じ)は、「立脚地」が作品中の何を示すのかについて
- 13 紅野敏郎・三好行雄・竹盛天雄・平岡敏夫『明治の文学』(一九七二年六月、有斐閣選書)の第2章の2、平岡敏夫「正岡子規」の記述より引用。
- 14 前掲『明治の文学』の第2章の1、清水茂「近代文学の誕生」の記述より引用。
- 15 前掲『明治の文学』の第4章の2、内田道雄「漱石と鷗外」の記述より引用。(九州大学大学院比較社会文化学府修士課程一年)